



多賀秀種 篇1

秋山城を劇的改造？

今回は、中世のお城であった秋山城を近世のお城に改修した人物、多賀秀種を見ていきたいと思えます。

秀種は、近江国（滋賀県）の武士である堀家の次男として生まれ、早くから近江国の武士である多賀氏へ婚養子になりました。天正 10（1582）年の本能寺の変以後は、兄の堀秀政の家臣として仕えました。兄の死後は、豊臣秀吉・秀長に仕え文禄元（1592）年に宇陀郡2万石を領することになります。

宇陀郡に入部し、まず着手したのはお城の整備をしたと考えられています。具体的にお城の整備とは、石垣を構築、礎石建物（御殿や天守）の建築など今の姫路城のような一般的なイメージのお城へ整備することを言います。これは過去の発掘調査で裏付けされています。城の中心部である天守郭の周辺や、城の大手にあたる南西虎口から酢漿草文こくちの家紋かたばみ鬼瓦がいくつか出土されました。宇陀松山城の歴代城主の中で酢漿草文を家紋として使用したのは、秀種のみです。このことから宇陀松山城の近世城郭の整備が秀種によって行われた可能性が非常に高いということが分かりました。

秀種は、慶長 15（1600）年の関ヶ原合戦において西軍に与したため、宇陀の領地を没収されます。その後は、加賀藩二代藩主の前田利常の家臣として取り立てられます。

秀種は、宇陀郡にいた期間は8年間という短いものですが、宇陀松山城の整備をしたということは大きな業績ではないでしょうか。

